

○水谷議員 もともと農業の知らない人も、指導があるんですか。

○説明者 自分の本を読んだりして、うまくいかなきゃ、次の年は違うようにすると。だから周りの人といろいろ話をしてアドバイスしてもらったり、もう専門になって、みんなにアドバイスしてます。

お隣の人がトルコの家族なんです。だから時々一緒にパーティーをしたりとか、かなり違う生活の仕方というか、食事の習慣があります。だから例えばイチゴの場合はジャムをつかって、それを売ったりとかするんでなくて、家族の子どもたちとかに渡したりとか、それぐらいです。だから、野菜はつくってご披露ということも余りないですけども、たまにお隣同士で一緒に何かするとかはあります。

○水谷議員 子どもたちは、こういうのはしないんですか。

○説明者 ちょっと少なくなりました。

○中井議員 この小屋を建てるにあたりまして、市の方の許可をいただくんですか。

○説明者 40年前はどうということなかったです。今は、やっぱり規則があって、24平方メートル以下とか。今、そのお隣が、ちょうど規則どおりにつくったようです。

(クラブハウスで)

○説明者 あずまやとか、クライנגルテンのその区画にある植物なんかは、借りてる人の持ち物になります。もし、それを、もう忙しくなっちゃったから、それとも体力がないからお返ししますということになれば、契約を解消するということになれば、だれかが来て、それを公式にどれぐらいの価値があるかというのをはかります。

それを買いたい人が、それを鑑定する人の費用というのは、今度は買う側が払うんです。だから、公式の鑑定者が来て、それをどれぐらいの価値のあるものかを出します。

売れるのは、あずまやと植物だけです。だから、この木は要らない、自分は払わないと言えば、その人は持っていてもいいわけです。

○中井議員 菜園に植えている物、それは買えるんですか。

○説明者 それは買わないとかいうようなことがあれば、じゃあ、あんたには売りませんということになります。だから、何とか上手に間を話をしないとだめだと、あずまやプラスこれこれで、これだけの値打ちがあるから、この値段を買う側がオーケーと言わなければ、その人は売れないです。だから、要らないものがあれば、その後、自分で取らないといけないのですね。

○中井議員 これは区画ですか。

○説明者 大手の区画のナンバーですね。例えば3. 2. 1のところには、あずまやの値段とというのが、書いてます。

市民農園についての歴史をちょっとお話いたしますと、ドイツで市民農園が始まったルーツが4つございます。

キールのまちが1830年に、貧しい人のためのこういった市民農園をつくりました。それは貧しい人たちが自分で野菜などをつくり、ちょっと食糧の足しにできるような、キールのまちがそれを提供して、貧しい人たちは借り賃なしで、そこで野菜をつくると言われてたんです。それが1つのルーツ。それが、ほかのまちがキールの一つの例をまねしたというのが一つの流れです。

それから、次のがシュリーバーガーデン、それが2つ目のルーツ。それは、ドクターシュリーバーというお医者さんです。子どもの教育に対してすごく興味があったお医者さまです。アイデアとして、健康のためには、やっぱり体を健康にするためには、精神も健康でなければならんというアイデアを持った人で、1864年に子どもたちの畑というのをつくったんです。だけど、子どもたちというのは畑に対しての労働というのをずっとできるような忍耐力があるかということ自分で考えていらっしやらなかった。そういうことで、結果的に子どもたちのためにシュリーバーさんは、畑をつくったんですけれども、両親がそれを手伝うというようなことになってしまって、1869年にライプチヒというまちがあるんですけれども、昔、一時、東ドイツだったですね、ライプチヒでも、既に100件、そういったガーデンができておりました。ということで、1869年にシュリーバーガーデンが生まれたというふうにいわれています。

3つ目は、ラобенガーデンって、あずまやのガーデンです。これはベルリンで始まったものです。ベルリンというのは、1870年時代に、すごく発達というのか、大きくなったまちです。栄えていたまちです。産業化が進んでおりました。それで、人々がその大きな都市に入ってきたわけです。それで、その人たちもやっぱり自分の住むところが必要であった。そこに住むのに、アパートがすぐ見つからなかった。そういうことでラобенガーデンといまして、あずまやの小さなところの小屋に住んだ。ガーデンが周りにある小さな小屋に住んだという、そういった事実が歴史の中へ残っております。

ところが、ただ、市の計画からいうと、そういうものは邪魔になって、勝手にそこに住んでるわけですから、そういったラобенガーデンという、あずまやのある、そういった人が住み込んだところは撤去してしまって、その人たちは、じゃあ、もう仕方ないので、そこにはまた新しい建物が市の方の撤去によってつくられて、そういうことで押し出されて、市の外の方に、そういったあずまやをつくったガーデンに住み込むようになっておりました。

4つ目が、それは労働者のガーデンです。労働者の畑には、赤十字社がやっぱり1つ目のルーツみたいに、余り経済的によくない、豊かでない人たちのためにつくった労働者用のガーデンがあります。1つ目がキール、2つ目がライプチヒ、3つ目がベルリン、4つ目の労働者用のガーデンとは赤十字社が提唱したものです。

20世紀の初めには、だんだんそういったルーツのあるガーデンがふえてきました。それで、1919年に、やっぱり規則というのが必要だということで、貸したりすることの規則などをつくり始めました。それで続きにクラインガルテンの事務所というのか、そういった一つの担当部署をつくりました。

その中には、例えば貸すときの値段と、それから約束をした後、じゃあ、これをまたやめますというキャンセルするための規定、そこに例えばクラインガルテンの一つのブロックがあって、でも、市の方の計画で、ここはほかのことに必要だから、ここをどいてほしいということになれば、市の方が、ほかのところと同じ広さのものを用意しなければなりません。

もともとの目的というのは、食糧をつくり出す、生産するという目的がとにかく大きかったです。第一次大戦の前とか後とか、余り生活が楽でない、そういう時代ですね。そういうころには、たくさんそういったガーデンを持つ人がふえてきておりました。ハノーバーでは、1936年には2万5,000戸のクラインガルテンがありました。今は2万戸ですね。1936年は、ちょうどナチの時代ですが、大体1960年ぐらいまで、大体この数というのは残っております。

ハノーバーでは、戦争で90%、まちの中が燃えてしまって破壊されて、その後、交通の道路の規格なども皆新しくして、新しいアパートに住む住居地というのをつくり、プランでつくっていった。1960年あたりから2万戸に減っておりますが、大体それで落ちついてきております。1983年にドイツ全体にクラインガルテンに対する規則、規約を新しくつくりました。それを担当したのは、国全体、国と州と、国の方では、それは建築と、都市計画、まちづくりの担当です。

州からいえば、それは、どの政治の政党が担当するかということか、政治をするかによって変わってきております。目下は、今のところは、国と同じなので、農業課の方に入ります。

クラインガルテンというのは、それぞれのクラブによって企画されております。今のところ、ハノーバーで100のクラブがあるというふうにメモしていただいたでしょうか。ただ、ハノーバーに100のクラブがありますが、その上に、連盟があります。これはハノーバーの市ですけれども、さらにニーダーザクセン州になると、またそれはそれなりの連盟がある。そうしますと、州の連盟になります。それが国単位になりますと、庭愛好家ですか、ガーデン愛好家の国単位の連盟という名前に変わります。ハノーバーの市民農園のそれぞれの単位の人たちというのは、すべての中に順番に下に属していくわけでありまして。

また、鉄道の線路があって、その線路の周りの土地というのは、1つのクラブで、緑化します。国全体のガーデンの愛好家の連盟のほかに、鉄道関係のガーデン、周りにあるガーデンのクラブというのがあるんです。それが6万3,000人がメンバーです。

ハノーバー市の緑の地区の計画のパーセントとか広さとかがあると思うんですけども、市民に対してなんです、森を提供して、それからヘレンハウゼンという有名な王宮庭園があ

るとか、そういうようなのを市民公開しております。市民が入れるようになっております。

それから、400もの子どもの遊び、遊園場所があります。10から20メートルのコンクリートになって、そこで子どもたちがサッカーが遊べるような、そういった場所があるんです。それが150だから、子どもの遊園地というのと、ちょっと遊具が置いたようなところが400個、150のほかにコンクリートにして4メートルのフェンスのある、そこでボール遊びができるような場所を市の方が提供しております。

私どもは、市民農園というのが市の中の緑の中の一つの機能を持つてるといふふうに考えます。というのは、この中でクラブの、例えばここは302戸あるんですけども、その人たちだけが入れるというんでなくて、一つ一つの土地には入れない、ガーデンには入れないですけど、その間の通りというのは、市民が自由に楽しみながら散歩できるような場所になっています。ですから、クライנגアルテンは、その人たちだけのものでなくて、市民もそれを楽しめるというような機能を持つてるといふふうにハノーバー市は見ております。

だから、やっぱり人間生活の中で、アパートだけでは完全ではない、やっぱり人間というのは、住むところに緑、土というものをさわる、そういった経験ができる場所がなければ、アパートというのか、住まいというのは完全ではないといふふうに私たちは考えます。

そうしますと、そういうところに住んでる人にとっては、こういったクライングアルテンというのが、それを補うということで、生活を完全にするための大きな役目を果たすんじゃないでしょうか。

○中井議員 それは、やはり人間としての心のいやし、ゆとり、そういうものですか。

○説明者 そう、だからやっぱり休暇というのかレジャーという、仕事をしてストレスがたまったものを、ゆったりと、今度は解消するという、そのための目的に手を使って土をさわるということはすごくいい解消法になると。

○中井議員 当初は、食べるための作物の畑だったものが、時代とともに心のいやしという形に変わってきたと。

○説明者 おっしゃるとおりです。今は、だからガーデンというのは、レジャー用のガーデンという名前が変わってきております、お野菜をつくってない人のところは、フリータイムのガーデン、余暇のガーデン。

○西議員 周りに農家があるような市民農園というのはありますか。というのは、農家の人たちと、例えばコンタクトとか連携、ネットワーキングみたいなことは、レクチャーがあるとか、そういうこともありますか。

○説明者 そういうのはないですね、だから農家が何かあったら手助けをしいてるといふタイプはないですね。ただ、だから1つのクラブには必ずだれか専門のアドバイザーがついております。そうすると、そのアドバイザーというのは、それぞれ講習をいつも受けてるので、新しいやり方とか、どういうふうにすると土壌をよくできるとか、その人がアドバイスする。

それで、質問があると、その人に聞けば指導してもらえます。

それで、セミナーなんかはないですけど、1カ月に1回、月報みたいなものがあるんです。そうすると、新しいいろんなニュースとか、そこにいろんなアイデアが書いてある。それで、新しい人がどこかで借りるということになったら、その人に対しては、アドバイザーなんかいろいろアドバイスでも、頼めば、いろいろと教えてくれます。そのアドバイザーは、お金なしでちゃんと教えてくれます。

例えば費用から申しますと、だれかが新しく、あずまやのついたガーデンを借りたいということになれば、500から5,000ユーロは、そこにある植物とか、あずまやについて払わなければならないんですね、鑑定された分を。オーケーならば、それを買うわけだから、500から5,000ユーロぐらいです、大体。それプラス1年に42セントが1平方メートルなので、350平方メートルを計算してみてくださいれば、それが年間の借り賃です。それからさらに保険がかかります、保険が、火災保険とか、保険がかかります。それプラスクラブ費用がやっぱり1年に200ユーロぐらいはかかります。

○中井議員 市に渡すんですね、500から5,000ユーロというのは。

○説明者 それは市でなくて個人にですね、だから、その前に借りていた人です。

払うのは、市に直接ではなくて、このクラブの上にある、市にある連盟があるんですね、そのところにそれぞれがお金を払って、そちらの方の連合から市の方にまとめて払うという、そういうシステムになっております。

○中井議員 失礼な言い方になるかもしれませんが、一見したところ、面積は非常に狭いように感じたんですが、利用者の方から、狭いとか、何とか広げてほしいとか、そんな要望はございませんか。

○説明者 狭過ぎる人は、じゃあ、2つ続けて借りたいという場合もあります。

○水谷議員 先ほど、人間生活は、アパートだけでは完全でないと、土をさわる必要があるということですけども、もともとは生きるため、生活のため、まず欲求やないですけども、やっぱりそういう生活とか、そういったものの安全を守るべきということから始まって、そして最後には人間本来の自己実現をしていくとすれば、何を求めているのかというところで、人間らしさというんですか、それから環境とか、そういったものを高次なものを求めていくようなクラブ活動になってるのか、ちょっとその辺を聞かせていただけますか。

○説明者 やっぱりタイプが年代によって違うんですね、使い方が。今のところ、ハノーバーでは、ちょっと問題というのは、だんだんと使ってる人が、クラブメンバーが年をとってきました。さっきの方みたいに、自分でまだ野菜をつくって、彼ももう多分70ぐらいになってらっしゃるけれども、まだアクティブに野菜をつくっているというのは多分例外であって、普通は、もう来て、どこかに寝転がってとか、太陽でそのまま自然に触れて、ゆっくりとしたいというようなお年寄りがふえています。ただ、若い人というのは、自分の子どもがアパ

ートへ住んでいると、静かにしなさいとかいうのが、そういうところに行けば、大きい声でして、動くのが自由にでき、自然とのコンタクトということが出来る。そういうことが若い家族にとっては目的になりがちです。

○水谷議員 多様化してるということですか。

○説明者 そうですね、ちょっと年代が年寄り化してるというのか、そういうことは今のところ、ハノーバーでは問題になるかもしれないです。

○西議員 市が、この運営に関して払ってるお金、コストはどういう項目がありますか。というの、お金はかかってないですか。

○説明者 もちろん、余りたくさんは入ってこないですね。ただ、市の方は、この大きな土地のところに対しての費用がかからずに、きれいになります。それに対しては市にとっては大きなメリットになるんです。なければ、この辺をほっとくわけにいかないですから、手入れするには、人が、ヘレンハウゼンの王宮庭園、このお隣にも、クラインガルテンの横にも通りのこっち側にある。それを合わせると、大体50ヘクタールぐらいあるんです。その50ヘクタールというのは、50人で今、市が手入れしようとしています。だから、これだけの広さのところの緑を管理しようと思えば、かなりたくさんの人手が必要になります。そういう意味では、それは市の方が節約できると。今は、市がこのクラインガルテンがあることによって払ってるお金というのは、25年間、もうほとんど投資していないです。当初、このあたりをつくったときは、周りのさくをつくったのと、このクラブハウスを市の方が建てています。

○西議員 クラブ費用じゃないんですか。

○説明者 市がやっています。ただ、それぞれのあずまやというのは、借りている人がつくっていますから、出しています。

○土師議員 日本の場合は、官から民への流れがありますからね、市がこういうことを受け持つというんじゃないしに、民間会社がこういうことをするのを、市がどういうふうに補助できるかという視点で考え直さなければと思うのです。そういうときに、高齢化が影響しますから、日本においても、この組織化というのをお手本にしまして、日本でも生かせるかを考えていかなければいけないというのが、私の実感です。

そこで、アドバイザーがおられるとお聞きしたのですが、この組織化をしていくため、コミュニティ形成、文化的なものであるとか、例えば素材を使っての料理教室とか、植物の育て方とか、具体的なことをお聞きしたいんですけど、いかがでしょうか。

○説明者 料理教室とかとてもいい考えだと思います。今、ハノーバーで新しいモダンなガーデンというのがあるんですけども、それはこの地下に車の駐車場があって、その上のところにガーデンをつくって、そこにシュリーバーさんの時代のときには、1つのこれだけ大きいところでなくて、1つの畑のところにお野菜をつくりました。それと同じに、ハノーバー

にもいろんな国の人か住んでるんで、例えばイタリア人、トルコ人、スペイン人、今最近はポーランドとかロシアの人がだんだんと住んでいます。ハノーバーに彼らのつくる野菜を見本につくるというようなモダンなクラインガルテンがあります。

そのクラブがあって、インター文化のクラブというのがあります。だから、インターカルチャーガーデンというふうに考えればいいですか。

そういったクラブがあって、それを借りて、そのクラブが、先ほどの地下に車のある、そのところを借りて、それですごく成功しています。そういったようなのを、また別のところにもやり始めています。

○土師議員 利用者プロフィールですが、教えていただきたいのですが、集合住宅と戸建ての利用者の比率というのはいかがでしょうか。

2万戸がありますが、ハノーバーで。利用者プロフィールですが、集合住宅や団地ですね。クラインガルテン利用者の戸建てに住んでる人と集合住宅に住んでる人の比率はいかなものでしょうか。

○説明者 すごい例外です。だから100%ないとは言えないです。でも、おっしゃったようなこと、今、調査をしようと思ってるのところなんです。だから、どういうプロフィールの人がクラインガルテンに対してかかわってるかというのを、今年、ちょうど市の方からアンケートをとろうというふうに考えています。

○池田議員 さっきイメージのことをお聞きして、何となくわかったんですが、ここのコミュニティ、雰囲気自体、何となくわかったんですけど、ちょっと聞いたかったのは、外国人、先ほどの方もトルコの方が横におられて、一緒にやるとか、さっきポーランドもいればロシアもいればという、外国人と一緒にやってる雰囲気が、もうひとつ、イメージがわからないんですけど、本当にいい雰囲気なんですか。

○説明者 すごくいい雰囲気なんですが、それは外国人同士の間のいい雰囲気なんです。だから、ドイツ人がかかわってるというんではないです。

多分10%ぐらい、やっぱり差があります。隣の人とすごく仲よくする場合もあるし、余りコンタクトをしない場合もあるから、人によって違います。やっぱり10%ぐらいは、多分、外国から来てる人が借りてるということはあると思います。大体それぐらいのイメージで。その分は難しいです。

○池田議員 それは外国人に貸さないといけないということなんですか。

○説明者 フリーです。それは全然規定も何もないです。貸さなければいけないということはないですし、貸してはいけないということもないです。だから、経済的に余裕のない人は、500から5,000ユーロの、先に借りてた人に払うというのが払えない場合があります。

2000年の初めのころに2万5,000ユーロを市が出して、同じく、このクラブの属している、いわゆる市の方の連合とが両方が出し合って5万ユーロを庭に、お金の余りない

人で、余り費用の出せない人が借りれるようなものを提供するような庭をつくったんです。

だから、例えば500から5,000ユーロで、1,000ユーロのものを借りたい人がいても、お金がない人があるけど、借りたいという場合に、この先ほどの5万ユーロというのを基本として、それから貸してもらおうというのか、もらえるというような補助、基金みたいな、そういうプロジェクトが2000年のころにあったんです。それは1回だけでしょうけども。でも、基金です、後で、利子なしで、だんだんと返していくと、一遍に出せないけども、そういったような助成金も出したと。

○水谷議員 きょうは市民農園ということで、私どもの堺では、貸し農園といいまして、あいてる畑を市が借りて、それでまた市民に貸すということがあります。ただし、そういう建物とかは建てられない。そしてコミュニティもほとんどないということで、作物をつくるだけなんです。そういうコミュニティを中心に私どもも施策に生かせるところがあれば生かしたいと思います。ありがとうございました。